

4. 5 国大が学生バスケ界の名門校であったこと

浜田 彬

柳田兄より、一期一会第2号に何か寄稿してほしいとの依頼有り、何となく各位が、余りご存じないと思う国大がスポーツの一角で輝いて居た時期が有った事、紹介して見ようかと一文を書いてみた。

大学入学直後、立野に通い始めた時、昼休みにバスケットボールで遊んでいると、学芸学部の一員から、バスケットボール部の練習を見に行かないかとの声を掛けられた。大学スポーツはレベルが高く、何となく小生には敷居が高かったが、好きなスポーツで有ったので覗きに行ってみた処、自分にもできそうな気がして入部した。それまでは全く知らなかったが、国大の前身の一部の神奈川師範は全国の高等学校中で1~2を争うバスケの強豪校で有ったとの事、その名残を引き継いでいる国大バスケ部は関東新制大学リーグの前年度優勝校であった。しかし、その練習風景を覗いた小生の目には「これならば自分にもついていける」との思いがして、何となく入部する次第となった。これが小生の教室に余り顔を出さない学生生活の始まりとなってしまった次第です。

その春には、早速神奈川選手権、関東甲信越国公立大学選手権、と引き続いて大会があり、小生も試験的に起用され結果的に大活躍して両大会とも優勝した。

公式戦とは違うが、当時の横須賀米軍基地のバスケチームから、毎年招待試合を申し込まれ、基地キャンプに赴き、米軍チームと親善試合を行っていた。

小生の入学した年も例年同様招待試合が行われる事となり、ある日の夕刻、横浜駅東口前にチームが集合し、米軍お迎えのバス（人員輸送用の大型幌付きトラック）に乗せられ、武山キャンプに送られる事があった。何となく未経験の勝手の判らない事では有ったが、チームの先輩方は例年の経験から、のんびりと道中を楽しんでいる様子であった。キャ

ソープへ到着すると、当時では日本人一般は戦後の焼け跡生活の様相であったのが、米軍キャンプでは、優雅な生活設備で、体育館も立派な物が建っていた。試合そのものは体格・体力差で、善戦はしたが、敗れてしまい、試合後のシャワー、豪華な夕食ともてなされ、こんなに国力に差のある国と戦争しては勝てる訳は無いなと思わず実感させられた事があった。

その後、初夏にかけては一般・社会人も含む日本選手権の関東予選があり、これにはOBも含めた国大クラブで出場、優勝して関東代表となった。

秋の関東大学新リーグ戦では、初戦の相手が昨季2部リーグ優勝した新進の芝浦工大と対戦、1勝2敗で勝ち点を落としてしまい、その後の4校との対戦ではすべて勝ち点を挙げたが、結果2位で優勝を逸してしまい、常勝校の名誉に傷をつけてしまった。

その翌年には、過去の栄光に輝いた神奈川師範の生き残りメンバーが卒業し、弱小メンバーとなってしまったので、その年度のリーグ戦では3位、その次は最下位で2部優勝の日体大との入れ替え戦に辛うじて2勝1敗と逃げ切り、辛うじて1部リーグに残留したが、小生の最終学年ではついに2部優勝校の日体大との再度の入れ替え戦で敗れ、1部リーグの名門校の名誉をも失ってしまった。

その後は残念ながら一度も1部リーグに復活する事なく、現在に至っている。

これが、ともかく国大も一時は学生バスケットボール界の栄光あるチームとして存在した事を各位に紹介する為に起草した拙文で、お目汚しになれば幸いです。